

大友であるとも、西政文化に興味をかきたてられ左
文化人でもあつた。佐伯惟教が十二年に及ぶ漂泊から復
帰したことを無條件で喜んだ宗麟は、最良大名としての
野心、行動は残しなからず、キリスト者的心境を具備し
ていたのではなかつたか。

元龜三年の伊豫討伐はたしかに一條兼定が援助を請う
ていたに違いないが、西園寺氏の降伏で、それ
以上の進出をせず凱陣させようとは、四國に雄飛しよう
してゐる新興勢力長曾我部氏との討伐を避けたものでは
なかつたか。そうした宗麟の心づもりにもかかあらず、
翌天正元年には女婿一條兼定と長曾我部元親の封立が設
けられ、幡多中村城を捨て兼定は大友家を頼んで土佐を
脱出、豊後水遣を渡つたか、北且が強く臼杵に入津する
ことが出来ず、佐伯宮、内に着到した。

天正二年甲戌、一條兼定が家臣長曾我部元親に被
逐、携其妻並三位中将政及男女子、到豊後。居ニ
之臼杵一着遇。其後兼定、赴豫州一着兵、歿。後ニ土
州。元親弑之。遂領ニ一條旧地。 (大友文書録)

さる程に、康政公豊後へ渡極の折節、船北風に落
され、豊後佐伯宮ノ内と云ふ所へ着しかば、佐伯惟
教馳走により暫くましまして、其後同國臼杵下居住
侍りき。康政公御台所以上佐伯に渡し置かるる。宗
麟公、紫田次右衛門尉とさし渡され、大津の御所並
に元親にも理りける。豊後より仰せ遣されしことな
れば、別入子細に及びず、懇懇に使者を相添へ、御
幼少ノ姫君諸共に豊州へ返し給ひき。 (大友興廢記)

大友宗麟爲に假館を築きて之を冥き、尋いで人を

土佐に遣はし、夫人氏を迎へて焉を謀にす。 (四國軍記)

一條兼定が佐伯宮ノ内に着いたのは天正二年春のこと
らしい。おそらく兼定は宿毛あたりから船出し、ともか
くも豊後ノ沿岸を目指したもので、兼定の船が宮ノ内に
着いたと聞いた佐伯惟教はねんごろにこれを出迎えて、
柵竿礼城に案内し、接待した。惟教の報らせを聞いた宗
麟はさつやく丹生島城内に仮館を設け、兼定を迎えた。
このとき兼定の船は沿岸沿いに番直川口に行き、川を遡
行して古市村に、そして柵竿礼城に到達したのではな
かろうか。いささか飛躍した推察ではあるが、私は潮谷寺
本尊の古仏物語の背景は、こゝ兼定の佐伯漂着ではない
かと考へてゐる。兼定は土佐中村を脱出するとき(天正
元年九月)難験して甞形となつており、彼は身分として
土佐の國守であり大蛇に化したと想定していません。不
自然ではない。古仏は一條家に伝ふる念持仏で、口なかつ
たろうか。私は佐伯氏と伊豫あるいは土佐ノ交流關係を
測へた結果、こゝに大想念にとらわれ、自らその口マン
に満足してゐる。

(註) 一條兼定は房基の子、大友興廢記、陰徳太平記を
参照し、康政と託してゐる。内政は兼定の嫡子
幼名吉房子、大津御所という。長曾我部元親の女
婿となる。 (以上)

(次ページ下段がつづき)

ころです。(後巻)

(備忘録) 以上のお手紙を追つかけようには、参考資料が送つて来
ました。佐伯氏の研究に参照されることを希望してここにかけまし
た。特に佐伯清次郎氏(丹生島)佐伯朝明氏(高田)両氏の研究を。

言論

愛媛県小松町の佐伯姓について

— 榎屋氏の佐伯氏の一族ではないか —

会員 麻生英臣

(長門県岩手市・佐伯市出身)

(前略)

今日は大変興味あるニュースと記します故、もし佐伯史談会の方で未調査、未解明でし左ら、これから研究テーマとして研究、調査をなさることも進言いたします。そのテーマは「佐伯を去り宇和島に移つてからの佐伯一族はその後どうなり、現在どうしているか」と云うもの

「い最近、同じ伊藤志の総務部で、私の用事をきかれたいアライタリしてくれ、しつかりし若く女性が居ります。胸に名刺をつけ、聞いて「佐伯」とありますから、「彼女は大分県の佐伯と何か関係があるのではなないですか」と謎をかけましたところ、自分日愛媛県の出身を述べたが、「はい、昔、祖先は大分県の佐伯から移つて来た」と聞いて、い、と云う話とほじかました。佐伯同美子と云う人です。彼女の家は、現在大阪に移つていますが、佐伯氏の分家である旨説明してくれました。詳しい資料日愛媛県の本家があり、大分県歴史館ループがよく調査に訪れているが、早速彼女もわかる範囲の系図を、過去性によつて調べていた、たきました。

「系図」というのは同封(下記)の如きもので、代々「惟」の字を引ついでいるとみるに、ついで、ます間違いないと思われるに、たりました。

この佐伯氏の本家は、現在同封(下記)の如き住所を有つて居る。い近年の市町村合併まで、愛媛県南条郡石根村大字大頭で、現在は愛媛県小松町大頭と改り、当主は佐伯ふじといふ八十才近頃のしんしんしん左記憶

カ、い未亡人で、そこに暮しているのだそう。この当主が生きておられる間に、史談会がフエリーボートにでも乗つて現地調査となされるチャンスを得られるように希望いたします。

(別紙)

本家惟水三休居士

二男

① 惟之

大田屋(西佐伯) 高橋市郎左門

本家三男 佐伯源吉市

室・佐伯惟豊女

② 惟祐

室・佐伯文左市 惟徳女

(吉田)佐伯

室・惟之女

室・佐伯文左市 惟徳女

本家二若市男 惟徳男

③ 惟堅

室・佐伯文左市 惟徳女

惟寛

忠朔

佐伯豊頭 三男

④ 惟寛

⑤ 惟楚

⑥ 惟三郎

佐伯道太郎

⑦ 晴喜

晴我長男

⑧ 惟道

⑨ 勤

ふじ(当主)

伊藤志にもう一人佐伯と云う小豆島出身の女性がおられ、ご先祖はやはり佐伯から来たと云つておられます。その人の父親は歴史に興味を持っておられ、以前は成る佐伯まで調べに掛けたことがあるそうです。小豆島に氏佐伯部蒸があるそうです。

右の敬敏と成り村出身で、現在関西地区へ実力者である佐伯勇氏(女機電機社社長、大阪商工会議所副会頭)がおられます。今伊藤志の上司を通じて佐伯勇氏に、もしも佐伯一族の流れではないかと調査の段取りを聞いています。

(前頁下段のつづ)